Tulips University of Tsukuba Repository

バスケットボール競技の原理論的研究

著者	内山 治樹
内容記述	筑波大学博士（体育科学）学位論文・平成24年3月23日授与（乙第2590号）
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/2241/117920

【446】

氏　名（本籍）	内山治樹（埼玉県）
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博　乙　第　2590　号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**バスケットボール競技の原理論的研究**

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	佐藤臣彦
副　査	筑波大学教授	教育学博士	清水　諭
副　査	筑波大学教授	博士（工学）	高木英樹
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	吉田武男
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	鬼界彰夫

論文の内容の要旨

（研究の目的と方法）

本研究は、それぞれのスポーツに固有で特異な「競技力」の存在のしかたに着目して、バスケットボール競技を原理論的に考究することを目的としている。また、先行研究の綿密な検討から、「競技力」については、これまで経験的レベルでの把握に留まって何ら共通理解が得られるには至っておらず、理論レベルで「競技力」を把握するには、方法として論理的一貫性を有する分析装置が不可欠であるとしている。そのため、本研究では人間存在の多元性という特質に基づき、「競技力」を「身体性」「知性」「感性」という三つの能力からなる複合的構成体として把握し、「勝利を実現し達成するために不可欠な卓越性の追求にかかわる専門知識としての能力のシステム」と規定した上で、スポーツへの構造論的アプローチ（スポーツ構造論）を援用しつつ、「バスケットボール競技」というスポーツ文化を体系的に究明しようとしている。

（論文構成と概要）

全体の構成は、序章：予備的考察（①問題の所在、②研究の方法、③本研究の課題）、第一章：競技力を構成する契機としての身体性（序節、①個人における身体技法、②対人的な身体技法）、第二章：競技力を構成する契機としての知性（序節、①ルールの改廃増補、②戦術行為の創案、③トレーニング法の開発）、第三章：競技力を構成する契機としての感性（序節、①競技者における感性　テキストとしてのマイケル・ジョーダン、②チームにおける感性　ゲーム・スタイルにみる「戦い方」の是非、③コーチにおける感性　先導者としての美的・倫理的価値観）および結章：本研究のまとめと今後の展望、となっており、スポーツ構造における身体的契機、知的契機、感性的契機それぞれに対応する構成が取られている。

本論第一章：「身体性」では、バスケットボールにおける「個人的身体技法」および「対人的身体技法」それぞれについて、「基層的運動形態」「象徴的運動形態」を分析カテゴリーとしながら総体的に考察している。「個人的身体技法」における「基層的運動形式」としては、「オフェンス」（「ボディ・コントロール」「ボール・ハンドリング」）および「ディフェンス」（「ボディ・コントロール」）を、「象徴的運動形式」としては「シュート」を取り上げ、「対人的身体技法」については、「基層的運動形式」として個人およびグループにおける戦

術行為を、「象徴的運動形式」としてチーム戦術を取り上げ、「精選構造化」という観点を踏まえつつ、こうした身体技法が「疎外」という秩序を内在させた自立的な存在性を有するものであることを明らかにしている。第二章では、対象化され成文化された「理論知」というレベルにおいて、「ルールの改廃増補」「戦術行為の創案」「トレーニング法の開発」という3点から、バスケットボールに関する特異な知的営為について考察している。「ルール」については「攻撃を強要する」志向性によって顕現化する「技術」や「戦術」、それらが「おもしろさの保証」となるメカニズムについて考察し、「戦術」論では、「関係論的アプローチ」をすべきであるとして「アウト・オブ・バウンズ・プレイ」を分析している。また、「トレーニング法」では、従来のトレーニング論を批判的に検討した上で、最終的に「最適なトレーニング・プログラム」を構成する諸要素を例示している。第三章では、バスケットボールにおける感性的契機を剔抉するため、その象徴的存在といえるアメリカのNBAを分析対象とし、個人レベルとしてマイケル・ジョーダン、チームレベルとしてシカゴ・ブルズ、先導者（コーチ）レベルしてフィル・ジャクソンを「典型例」として取り上げ、関連する文献資料を分析することで、世界最高峰のNBAバスケットボールを支えている美的・倫理的価値観を明らかにしている。

以上の考察を通して、バスケットボールにおける競技力の全体像は、身体的契機と知的契機との相互規定性、およびそれを統御する感性的契機からなる「複合的構成体」であり、各契機が有機的に関連し合う関係のネットワーク（システム）として存在していると結論づけている。

審査の結果の要旨

本研究は、スポーツ文化に特有の「競技力」について、特にアメリカにおいて代表的なメジャースポーツとなっているバスケットボールをとりあげ、スポーツ構造論に基づく「身体的契機」「知的契機」「感性的契機」それぞれの分析視座から考察することで、その全体像を明らかにしたものである。方法論として特質すべきは、一回性を本質とする実際のゲームを経験的手法によって分析するのではなく、バスケットボールというスポーツ文化を構成する諸要素全体を視野に収めつつ、より本質的な契機を抽出した上でそれらを論理的に再構成するという方略をとっていることである。こうした方法論を援用することで、バスケットボール競技を原理論的、哲学的に把握する道が拓かれたと評価できる。また、本研究における方法論は、各スポーツ種目それぞれに援用しうる可能性を胚胎しており、その先駆的意義についても高く評価された。

平成24年1月19日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。